



穴戸健夫の保育構造論形成に対する教育諸科学からの影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): collectivist theory of early childhood education, class management, project activities 作成者: 吉田, 直哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017258

宍戸健夫の保育構造論形成に対する教育諸科学からの影響

吉 田 直 哉

大阪府立大学人間社会システム科学研究科

要 旨

本稿は、教育学者・宍戸健夫による保育カリキュラム論（保育構造論）の形成過程を見ていくことで、その特質を明らかにするものである。宍戸の保育構造論の構築は、1960年代以降、彼のライフ・ワークとなった。宍戸の保育構造論は、教育学を初めとする社会科学から豊富な刺激を受けて構築された。三木安正の集団主義保育計画論、城丸章夫の学級経営論、名倉啓太郎の生活時間の分化＝発達図式、久保田浩・安部富士男の生活を中心とした保育カリキュラム論などを、おおよそこの順に摂取・消化して、1980年代に発表されたのが保育構造論であった。彼の保育構造論は、2000年代に入っても再構成され続けている。

キーワード：集団主義保育（伝えあい保育）、学級経営論、プロジェクト型活動

はじめに

本稿は、教育学者・宍戸健夫（1930-）^{ししどたけお}による保育カリキュラム論の構想、いわゆる保育構造論の形成過程を見ていくことで、その特質を明らかにすることを目的とするものである。分析視角として、教育諸科学の成果が、宍戸の保育構造論にいかにかに摂取されたかに焦点を当てる。宍戸は本稿執筆現在（2020年8月）も健在であり、今なお旺盛な研究・発信活動を展開しているため、いわゆる思想史研究の対象としては適切でないと思われるかもしれない。ただ、本稿が検討しようとする宍戸の保育構造論は、後述するように、1960年代から半世紀以上にわたって宍戸が彫琢を試みてきたライフ・ワークの成果である。宍戸は、大学院を満期退学した1950年代から、その時々^{そのとき}の主導的な保育潮流、保育政策に対して、相対的に距離を置きつつ客観的に論評し、その思想的・理論的背景を明らかにしようとしてきた。そのような経緯は、宍戸の保育理論の精華としての保育構造論が、戦後保育史、特に保育理論史、政策史との格闘を経て精錬されてきた、いわば歴史的構築物としての性格を有することを示唆していよう。ところが、宍戸の膨大な業績（愛知県立大学退職までの宍戸の業績一覧は、宍戸（1996）所収）のうち、彼自身の保育カリキュラム論に関する批判的検討はきわめて希少である（ただ、宍戸の保育構造論に対する言及が皆無というわけではない。例えば、加藤（1997）、小山（2002）、師岡（2015）などは、宍戸の保育構造論の特色について触れているものの、それらは概略的なレビューの域を出ていない。宍戸の保育構造論が、いかなる思想的・理論的影響のもとに構築されたのかに関する考察をそれらは含んでいない）。

宍戸の業績は、①主に近代の日本保育史研究、②保育問題研究会の「伝えあい保育」の思想の具現化としての集団主義保育論の構想、③教育諸科学の成果を取り入れた独自の保育カリキュラム構想としての保育構造論の形成、という三つの軸に沿って展開されている。

宍戸の保育構造論の構築過程が特徴的なのは、保育実践記録の精緻な読解、実践者たちとの活発な対話、共同的な保育実践研究の成果をそこに反映させようと試みたりアリズムのためだけではなく、明治期から戦後までの、日本におけるカリキュラム理論史と実践史を精緻にフォローしながら、日本保育カリキュラム理論・実践史を、日本における保育カリキュラムの発展史として再構成しようとしたためでもある。宍戸は、2001年時点において、日本の保育カリキュラム史が「3つの潮流」によって形成されてきたという認識を示している（宍戸 2001）。「3つの潮流」とは、日本における幼稚園草創期においてアメリカから導入された「課業活動を軸とするカリキュラム」、和田實・倉橋惣三らの系譜に連なる「遊びとその発展を軸とするカリキュラム」、城戸幡太郎に率いられた保育問題研究会が構想した「集団生活の発展を軸とするカリキュラム」である。これらの「潮流」の諸類型はいずれも、いわば理念型として提示されたものである。「個々に独立して存在するというのではなく、それぞれが重なり合って」実践を形成してきたという（宍戸 2001：87）。これらの「潮流」の「重なり合い」、あるいは「相互作用」を見るときに有効な視点として、宍戸は保育構造論を挙げている。つまり、宍戸にとって、保育構造論とは「3つの潮流をどう生かすか」という視点として構想されてきたものだということである（宍戸 2001：87）。

本稿は、直接的には宍戸の保育史研究に焦点を当てるものではない。しかしながら、宍戸の保育構造論の構築過程は、上記のような、日本の保育カリキュラム史からリソースを抽出し、それを現在において保育実践を計画し、捉え返す視点を据えようとする過程であったともいえるであろう。彼による近代以降の保育実践史研究は、カリキュラム理論・実践史としても描き出されているため、本稿は、彼の保育史に対する認識をも、いわば裏面から検討の光を照射して明らかにしうると考えられる。

宍戸の保育史研究に対しては、幼児教育史学会に属する研究者を中心に、いくつかの言及がある。しかしながら、宍戸が1960年代から一貫して取り組んできたカリキュラム論、特に保育構造論と呼ばれる独自の保育計画論についての理論的検討はほとんど行われていない現状にある。

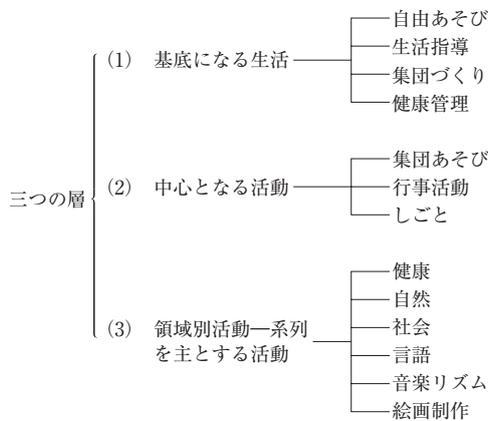
既に述べたように、1960年代後半から、宍戸の保育理論は、教育学を初めとする社会科学諸分野との活発な格闘を経て構築された。この特徴を踏まえるならば、宍戸の保育カリキュラム理論の成果としての保育構造論は、日本の保育カリキュラム理論史・実践史の総括的業績の一つとして位置づけることができる。保育構造論の提案が、1960年代に緒に就き、1970年代に隆盛を迎え、1980年代以降、批判的検討を被りながら退潮していったのだとすれば（小山 2002：44）、宍戸の保育構造論はまさに「保育構造論」史の総決算期に提示されたものといえる。20年以上にわたる保育カリキュラムをめぐる理論・実践の双方を視野に収めた包括的な視野のもとに構築されたカリキュラム論は、他に例を見ない精緻なものである。具体的に言うと、三木安正の集団主義保育計画論、城丸章夫の学級経営論、名倉啓太郎の生活時間の分化＝発達図式、久保田浩・安部富士男の保育構造論などを、おおよそこの順に摂取・消化して組み上げられたのが、1980年代に入って宍戸が提示した保育構造論である。1980年代になって初めて図式化された宍戸の保育構造論は、その後も固定化されることなく自己検討の対象として位置づけられ続け、2000年代に入って大きな改訂を加えられ、現在に至っている。本稿は、その過程を跡づけたい。

本論に先立って、宍戸の略歴を記す。宍戸は、1930年、神奈川県横浜市に生まれ、生後間もなく現在の東京都大田区蒲田に転居する。1951年からは、東京大学のセツルメント活動に従事した（宍戸 1996：9）。東大では、大田堯のゼミに参加、「生活綴方」に関心をもつ。「生活綴方」への関心は、のちに保育問題研究会が提唱する「話し合い保育」、つづいて「伝えあい保育」の理解に大きな影響を与えたという（宍戸 1996：18）。1954年、東大教育学部教育学科を卒業、同大学院博士課程を経て（1991年東大から博士（教育学）の学位授与）、1959年愛知県立女子短期大学（のち愛知県立大学）講師に就任する（1963年同助教授、1973年教授、1996年定年退職）。

その後、佛教大学、同朋大学の教員を務め、現在愛知県立大学名誉教授である。1956年から入会した全国保育問題研究会では、中心的メンバーとして活動し、1976年からは愛知県保育問題研究会会長、1983年からは全国保育問題研究会常任委員会代表委員などを務めた。

1. 宍戸の保育構造論の前駆としての久保田浩・安部富士男のカリキュラム案

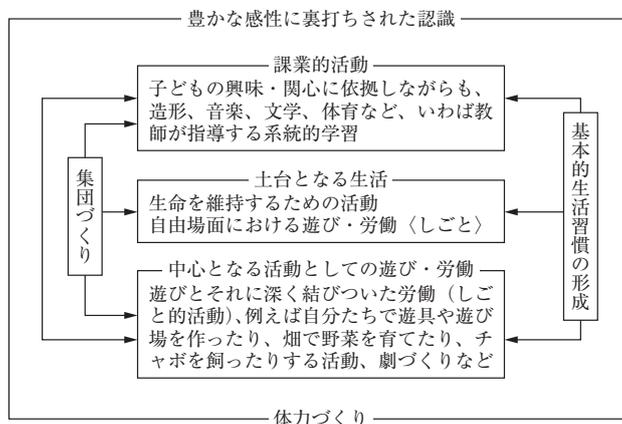
既に述べたように、宍戸は、日本における保育カリキュラム史を概観しながら、その中の画期的と思われる要素を自らの保育構造論に摂取してきた。宍戸によれば、彼自身の保育構造論の先駆的な取り組みは久保田浩の『幼児教育の計画：構造とその展開』（1970年）であったという（宍戸 2000：99）。久保田は、幼児教育の構造を、「基底になる生活」「中心になる活動」「領域別活動」という三層の活動の複合として捉えた。「基底になる生活」には、自由あそび、生活指導、集団づくり、健康管理など、多面的な活動が含まれている。



図表1 久保田浩の保育構造論

「中心となる活動」を成功させるためには、子どもたちが技術・技能を向上させていく必要性が生じ、その必要性を満たす活動として「領域別活動」が位置づけられる（宍戸 2009：52）。宍戸によれば、基底になる生活は自由あそびを含むため、環境構成型カリキュラムと親和性が高く、中心となる活動はプロジェクト型カリキュラムと、領域別活動は設定保育型カリキュラムと、それぞれオーバーラップするという（宍戸 2009：55）。

久保田の保育構造論と並び、宍戸が複数回引用する保育構造論として、安部富士男が安部幼稚園において行った保育実践を基盤に創案したものがあ（宍戸 2003：63）。



図表2 安部富士男の保育構造図

宍戸によれば、安部の保育構造論は久保田の所論を継承したものである（宍戸 2001：89）。子どもの生活を三層からなる重層構造として把握している点は、確かに安部の構造論と久保田のそれは共通している。しかし、宍戸によれば、「集団づくり」の位置付けが、久保田と安部では異なっている（宍戸 2001：89）。久保田においては、「集団づくり」が「基礎になる生活」の中にも含まれている。「基礎になる生活」は、日常的な繰り返し、言い換えれば変化することなく反復することを特徴とする。ところが、宍戸によれば、「集団づくり」はそれ自体が、「1つの目標をもった活動の展開」として位置づけられなければならない。つまり、宍戸においては、「集団づくり」は発展的に変化していく活動である。このことが、安部の構造論においては、「集団づくり」が「基本的生活習慣の形成」とは異質な、保育活動を支える外構として位置づけられていることに反映されている点が特徴的だと宍戸はいうのである。

安部は、「土台となる生活」を中軸に「課業的活動」と「中心となる活動としての遊び・仕事」の三層から保育構造を捉えている。安部によれば、「土台となる生活」とは「生命を維持するための活動」「自由場面における遊び・仕事（労働）」の複合であり、「課業的活動」とは「子どもの興味・関心に依拠しながらも造形、音楽、文学、体育などの文化との出会いを、子どもの自発的活動を促す」ことによって実現しようとする「教師が指導する系統的学習活動」であり、「中心となる活動としての遊び・仕事（労働）」とは、「生活のなかから生まれた仕事の活動」、言い換えれば「子どもたちが自分たちの共通の課題のもとに、長期にわたって展開する活動」である。そして、これらの三層の活動を支えるバックボーンとして、「基本的習慣の形成」と「集団づくり」の両軸が据えられている。安部の保育構造論においては、自由遊びと課業とが関連しあって、「プロジェクト活動」が生み出されていくことに宍戸は注意を促している（宍戸 2003：63）。このような三層の活動を支える外構として「集団」あるいは「組織」形成を位置づけた点は、城丸章夫の学級経営論（後述）と共通すると宍戸は述べている（宍戸 2001：90）。

2. 宍戸の保育構造論の中核としての集団生活

宍戸がカリキュラム（保育計画と彼自身は呼称する）の構造的把握に努めた最初の著作は『日本の集団保育』（1966年）であった（しかし、彼自身はそれが十分なものでなかったことを認めている（宍戸 2000：100）。実際、当該書では、保育計画の構造が図式として明示されているわけではない。土方（1980：225）は、宍戸（1966）においても、「保育内容の区分」が行われているとし、「保育計画」を「クラスづくりの計画」「あそびの計画」「学習の計画」の三側面から捉えたとしている。だが、土方による宍戸の保育計画の再構成においては、「日課」（デイリープログラム）という「規律のある生活のリズムをつくりあげていく」という「保育計画のなかでもっとも重要な位置をしめる」（宍戸 1966：177）とされているものが含まれていないだけでなく、三側面の関連性が明示されることなく並列されているに過ぎない。このような計画の諸要素の関連付けの弱さは、土方に帰責されるものではなく、宍戸の保育計画の構造化が途上であったことの反映だったと考えられる）。そこでは、日本における保育方法論史の中で、集団主義の検討が不十分であることを指摘した上で（宍戸 1966：39）、集団生活の中における「目標の明確化」、「話しあいから行動へ」、「行動から話しあいへ」、「意識づくりと組織づくりの統一的な発展」という保問研における保育実践のプランは、宮坂哲文の生徒指導論（宮坂 1962）における「目的性の原理」と「実践性の原理」に適合するものだと述べている（宍戸 1966：45-51）。しかしながら、当該書で展開されているのは、集団主義保育における保育者の役割と子ども同士の関係性についての保育目標としての位置付けであり、子どもの園生活全体の構造化には至っていない。宍戸は「保育計画の構造」という節を独立させて保育構造を論じようという姿勢を見せるものの、そこで論じられているのは、子どもの「個性」と「集団」の発展の弁証法的関係であり、それを保育の「目的」のみならず「方法」としても位置づけて

いるのである（宍戸 1966：174-177）。「個」と「集団」の弁証法的発展という保育目的・保育目標は、「クラスづくり」「学級経営」の中で具現化されると宍戸は述べるが、そこで参照されているのはやはり宮坂哲文の影響を受けた生活指導論である（宍戸 1966：180）。つまり、1966年の時点では、宍戸のカリキュラム論において保育目的と保育方法が混淆して論じられており、その双方が生活指導論という学校教育学の概念を援用することで提示されていたのである。

宍戸が次に取り組んだのは、保育目的と方法を分節化させつつも、両者が密接に関連し合うようなカリキュラムの構造化であった。この取り組みの成果が、具体的な図式的表現を伴って提示され始めるのは1970年代以降のことである（1970年の時点では、未だ上記の状況を脱してはいない（宍戸 1970）。1977年の時点でも、宍戸は後述の城丸の学級経営論へのコメント論文の中で、「「保育の構造」を明らかにする仕事は、保問研としては宿題になっているが、城丸論文〔引用者注・（城丸 1977）のこと〕はこの宿題をとく鍵を与えてくれている」と述べている（宍戸 1977：46）。「宿題」に対する成果が、城丸の論考からの刺激を受けて現れ始めるのは、後述するように1980年代を待たねばならない）。1970年代の宍戸の主たる関心の対象は、保育の場における乳幼児の「集団」であった（宍戸 1975）。1979年の段階では、宍戸は木下龍太郎との分担執筆ではあるが、「保育内容の構造」として、「あそび活動」「生活指導」「課業活動」の3つの「内容」を挙げている（宍戸・田代編 1979：63-136）。保育内容を三層から成る「構造」として示した早い例と思われるが、そこでは子どもの「活動」と保育者の「指導」が混淆的に論じられている。

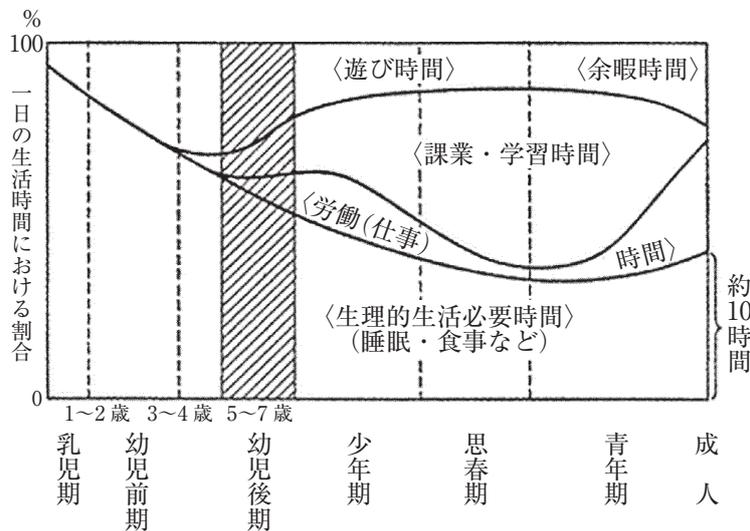
3. 保育構造論提示の直前における影響：城丸章夫と名倉啓太郎

保育目的と方法の統合化・構造化という取り組みを進める上で、宍戸が強い影響を受けたとされるのが、生活指導研究における城丸章夫（しろまるふみお）（1917-2010）である。1970年代になって、全国保育団体連合会の機関誌である『ちいさななかま』において、城丸は幼児教育論を展開しているが、そこで彼は子どもの生活を①遊び、②仕事（実務）、③勉強（学習）の三領域からなるものとしてまず捉え、低年齢児の場合には特に④養護という領域を加えて四領域としてもよいと述べる（城丸 1981b：19f.）。養護が他の領域から区別されて別個に扱われているのは、養護は「おとなが世話をすること」であるのに対し、それ以外の三領域は、子どもの活動が持つ「目的と性質」から分類したものであるからである。城丸がまず注意を促すのは、幼児の生活において、三領域は截然と区別されるものではないということである。というのも、幼児はそれらを「あそび」として融合させ、全体化させてしまうからである。つまり、城丸によれば、子どもの生活の三領域は、「あそび」という複合体として成り立っているということである。このような融合態としての「生活＝あそび」は、城丸によれば二つの観点から検討されなければならない。第一に、その生活が、どのような「社会関係・人間関係」によって成り立っているかという観点と、「あそび」「仕事」「学習（勉強）」のそれぞれの内容が、どのように関連しあっているかという視点である。つまり、城丸は、生活を、「社会関係・人間関係」と、三領域の内容的連環という二つの側面の「統一」として見ているのである（城丸 1981b：108）。

「学級経営」を「学級の集団生活の指導」としての捉える城丸（城丸 1981a）が、「縦軸に子どもの民主的な交友関係と自治組織を、横軸に遊び・仕事・学習をという、立体的構造で捉えるべき」とする点を宍戸は重視する。人間関係や組織という観点を「土台や骨組」として、その上に「遊び・仕事・学習」という活動の観点を組み上げ、「生活を構造的にとらえる」視座を宍戸は城丸から得たとする（宍戸 2000：100）。この城丸の学級経営論を、保育構造論へと翻案しようとしたのが宍戸の試みであったということができただろう。例えば、城丸は、小学校段階における「遊びと文化活動」は、「仕事と学習を分化」する母胎であり、「遊びと文化活動」が「仕事と学習」の双方を含み込むと同時に、「仕事と学習」への分化と移行を推進させる動力源でもあると

して、「遊びと文化活動」を重視している（城丸 1981a：17）。このような「遊び」の重視というモチーフは、後述するように宍戸の保育構造論においても共有される。

さらに、宍戸の保育構造論に影響を与えた論としては、発達心理学者・名倉啓太郎（1934-2006）の「生活活動の分化と生活時間の構造図」があった。



図表3 生活活動の分化と生活時間の構造図

名倉は、5歳から7歳にかけて、子どもの生活の中に「遊びと課業と労働」が分化し、それらが構造化されると見る（名倉 1979）。名倉においては、「自由性、自己目的性、自発的内在性」を特徴とするのが「遊び」、他から課せられ他に目的を設定した活動が「課業」、集団生活の中で、一人の集団成員としての社会的役割を担う「生活者」として、なんらかの価値を生み出し、自らをもまた他者をも喜ばせることのできる活動が「労働（仕事）」である。名倉によれば、乳児期においては、子どもの生活時間はほとんどが「生理的生活必要時間」が占める。1歳から3歳の幼児期前期において、徐々に「生理的生活必要時間」の割合が低下し、「遊び時間」が伸張してくる。3歳から4歳にかけては、「遊び時間」から「課業・学習時間」が分化し、さらに5歳以降は「課業・学習時間」から「労働（仕事）」が分化してくるといふ。

名倉は、まず、乳児期から幼児期にかけて伸張してくる「遊び」の変化を、「他者と共在し、他者とかかわりをもって遊ぶ楽しみ」を追求するようになることから生じてくると見る（名倉 1979：220）。つまり、名倉における乳児期から幼児期への移行は、生活における他者との交流、人間関係の深化として特徴付けられている。人間関係の深化・複雑化を経験する中で、子どもは「他の社会的存在から期待され、課せられる活動としての目的性に、自らを合わせ、その期待にそえるように、努め励もうとする態度が形成」されてくる。他者志向的な態度形成が、「課業活動」を成立させる当のものに他ならない。名倉において、課業活動とは、子どもが他者からの期待に応じようとするを動機とする活動なのである。

他者からの期待の内面化によって引き起こされるという点は、「労働（仕事）」も共通である。「自己と他者との関係の中で、一つの役割を果たすことができること、大人の意味に従って、その中で自らの意思を働かせることの意味を捉えた自己活動であり、自己実現であるところに、幼児の積極的な労働活動への意欲と態度の根源がある」（名倉 1979：223）。これは、「おもしろさ」によって引き起こされる遊びとは、やはり質的に異なる活動といわねばならない。

名倉は、幼児期後期において分化してくる「遊び」「課業」「労働」の3つの活動が、子どもの自発性・内発性、自律性・自立性を条件とする、「人とかがわり合った集団の中での自己活動」であるとして、活動の集団的側面を重視し、さらに、それら3つの活動が、分化してはいるながらも「相互に他を促進させあう」という連環の中にあるということを強調している（名倉 1979：225f.）。

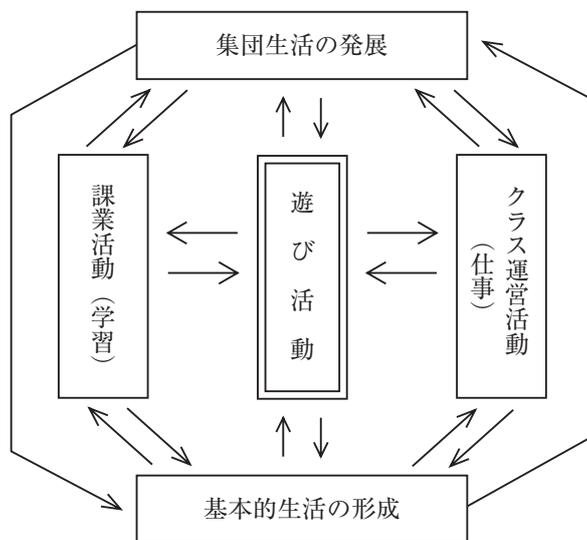
宍戸は、上記のような名倉の所論を、「乳幼児の基本的な生活活動（生理的生活必要活動）」を土台としながら、乳幼児の遊び活動が、発達が進み行きの中で、「課業・学習時間」や「労働（仕事）時間」にどのように分化し、関係づけられていくかを表現する発達図式として読んだ（宍戸 2000：102）。宍戸は、名倉の図を、「三、四歳ごろまでは、「生理的生活」と「遊び」とが、その生活の大部分を占めている」が、「四、五歳からは「遊び」と「課業・学習」と「労働（仕事）」へと生活活動が分化」することを示すものとして見ている（宍戸 1982：29）。年齢が低いほど「基底になる生活」にウェイトがかかり、領域別活動の比重は小さいが、4歳、5歳においては領域別活動、課業活動の必要性が子ども自身に自覚化され、それを積極的に自ら学ぼうとする意欲が生じてくると言う。この主張を裏付けるのが、名倉の生活時間の分化図であるという（宍戸 2009：55）。

宍戸が城丸から学んだものは、集団づくりを、諸活動を支える外構として位置づけることの必要性であった。そのことは、集団づくりそのものが、諸活動の一つではなく、三つの質を異にした活動の全てに関わり、活動の質の高まりと共に、集団の質も向上させるようなものとして位置づけられることを意味した。

一方で、宍戸が名倉から学んだことは、発達の中で、活動のウェイトが変動し、質の異なる活動の間の関連性が遷移していくこと、そして、それぞれの時期の発達を主導する活動が変遷していくということであった。一日の生活時間に占める個々の活動の長短は、宍戸においては、そのような発達をリードする活動の変化を意味するものとして受け止められたのである。このことは、保育構造が、発達の中で変容していく可能性を示唆している。宍戸が名倉の所論を摂取したことは、宍戸の保育構造論が、諸活動の相互関連の生態学的移行、すなわちクロノシステムを内在化したことを意味しているだろう。

4. 1980年代初頭における宍戸自身の保育構造論の提示

以上の影響を受け、1982年の時点で初めて（宍戸 2000：102）、「保育計画の構造」というクリアなシエマが提示されることになる（宍戸 1982：48）。



図表4 保育計画の構造

宍戸は、自らの構造図を、「縦軸に子どもの民主的な交友関係と自治組織を、横軸に遊び・仕事・学習を」位置づけるという「立体的構造」を持つものとして位置づけている。つまり、「横軸」とされる3つの活動が、「縦軸」とされる子どもの人間関係と組織に支えられる構造を持つものとして、保育計画を捉えようとする。

宍戸は、自身の保育構造論の特徴を、以下の五点にあるとしている（宍戸 2000：103f.）。

第一に、基本的生活の形成を土台として、最も基底に据えたことである。基本的生活とは、睡眠、食事、排泄、着脱衣、清潔など、基本的生活習慣と呼ばれてきたものが含まれ、これらは毎日、日常的に反復されるものだという点が特徴的である。ただ、「基本的生活が完成してからあそび、仕事、学習の活動が始まるというのではなく、あそび、仕事、学習の活動は逆に基本的生活の自立をうながしていくもの」だという点には注意が必要である（宍戸 2000：165）。

第二に、子どもの遊び活動を、「土台」としての基本的生活の上に展開される主要な活動として位置づけたことである。遊びは「おもしろさを追求する活動」であり、その点において自己目的的なものであるが、その一方で、遊びを通して体力、知力、社会性など多面的な子どもの能力の発達を促すものでもある。宍戸の「保育計画の構造」図では、遊びは幼児期の活動の中心を占めるものとして特記され、遊びから、後述する課業活動（学習）やクラス運営活動（仕事）が派生してくるとされる（宍戸 1982：49）。

宍戸は、遊びは「まわりの物への働きかけや模倣」という原初的形態をもってあらわれ、やがてごっこ遊びなどの「虚構（フィクション）の世界」が創造され、その世界の中で楽しむ活動へと発展していくと考えている（宍戸 2000：166）。

第三に、子どもたちによるクラスの自主的な運営活動を「仕事」または「労働」と呼び（宍戸 1982：45f.）、「自分たちのことは自分たちでできる」という自立・自治を目標として行われる、遊びとは質的に異なる「実務的活動」として位置づけたことである。保育者の「お手伝い」から始まって、グループ内での「当番」（順番に、交替で、日常生活で、くりかえされる簡単な仕事を、個人が担うもの）へ、更に、クラス全体に貢献するために、グループ全員が協力して、同一のまとまった仕事を行う「係活動」へと発展していく（宍戸 1982：57f.）。

第四に、遊び活動から分化するものの、「遊びを楽しくするための知識・技術を指導したり、また、逆に、遊びを発展させるなどのため、教材・教具を利用して知識・技術を順次的に指導したりする」ことによって、「子どもの感応、表現の力を系統的に豊かにする」（宍戸 2017：264）取り組みとして「課業」を位置づけたことである。言い換えれば、課業は「中心となる活動」（安部富士男）を生み出す媒介項、「主題」を中心とする保育活動を触発する刺激ともなるものである（宍戸 2017：264）。課業を通して、「体験的な活動を基礎として子どもたちの抽象的な思考力や基礎的な技術力・表現力」を高めていく活動であると同時に、個々の子どもの能力が「みんなのもの」になっていく活動、つまり能力の共有化が図られる活動でもあるとする（宍戸 2000：117）。課業は「学習」とも呼ばれるが、理論的性格を持つという点で、実践的性格を持つ遊びや仕事とは区別される（宍戸 2000：166）。小学校以降の文化の系統的な指導に発展していく基礎的な内容の指導が想定されており、その内容には音楽、造形、体育、ことば・文字、数・量の指導が含まれるという。これらの指導が「早期能力開発主義」に陥らないようにするためには、課業を常に遊びと結びつけ、それが「遊び的形態」として行われるようにすることに注意が必要であるとする。

課業については、宍戸は三木安正編著『年間保育計画』（1959年、フレーベル館）に触れつつ、「戦後のコア・カリキュラムのもっていた欠陥——生活を質的に発展させる見通しの欠如——が、『幼稚園教育要領』で克服されないままに、いきなり「六領域」が登場してきたことから、『要領』の意図とは別に、「領域」を課業的（もしくは教科的）に把握するという傾向」が生み出されたという1950年代の幼児教育動向について注意を促して

いる（宍戸 1982：29）。ただ、当時の教育要領においては、領域ごとの内容は非系統的であり、子どもの「態度」の形成にかかわるものを多く掲げていたことから、子どもに一定の態度を取ることを強制する「態度主義」の危険性をはらんでいたという（宍戸 1982：29）。

第五に、「集団生活の発展」を重要視したことである。この発想は、城丸からの示唆によって導入されたものである。城丸が言う「子どもの民主的な交友関係と自治組織」の発展を、宍戸なりに捉え直したものがこれである。宍戸にとって、「集団生活の発展」は、上記の「四つの活動を貫く中心軸」である（宍戸 2000：167）。「集団生活の発展」という見地から、上記の諸活動は「統一的、総合的に把握する」ことが必要となる（宍戸 1982：47）。宍戸は、集団の発展を、「集団生活の基調となるリズムを、保育者が中心となって創りとのえていく段階」である保育者中心的集団の段階から、「子どもたち自身が中心になって活動していくなかで、集団生活の内容を充実させるとのえていく段階」である子ども中心集団の段階への発展という二段階のプロセスとして捉えている（宍戸 2000：172）。「集団生活が、個々バラバラな群れの状態にあったものが、保育者の適切な指導を通して、仲間同士の相互理解に支えられた内容豊かな集団生活に発展していく」という集団の質的变化を重要視する発達観を宍戸は示している（宍戸 2003：44）。この「集団生活の発展」の重視というテーマは、宍戸は1950年代末から抱き続けてきた。その契機となったのは、既に触れた三木編著『年間保育計画』であった。宍戸は三木編著を、保育計画を、「子ども一人ひとりのパーソナリティー」を「集団生活の中」で形成されていくものとし、子どもの人間関係を、「民主的」な集団へと発展させていくことが、子ども一人ひとりの発達にとってきわめて重要だとした著作だと考えている（宍戸 2003：25）。宍戸によれば、三木編著は戦前のいわゆる第一次保問研のアイデアを継承した著作である。実際に、三木編著には、戦前保問研から参加した保育者の^{かいたかこ}海草子、畑谷光代らが参加している（宍戸 2003：25）。

集団生活を、宍戸が諸活動の基軸として設定したことの背景には、コスチュークの発達論、マカレンコの集団教育論がある。宍戸は、コスチュークの「内的矛盾」という概念（コスチューク 1982）を次のように捉える。すなわち、「子どもの新しい欲求、関心、志向と、彼の能力の発達水準とのあいだにある矛盾、社会環境が彼に提出し、かれがひき受けた要求と、その要求を満たすに必要な能力や技能の習得水準とのあいだにある矛盾、新しい課題と以前につくられ習慣化している思考方法や行動方法とのあいだにある矛盾」である（宍戸 1970：59）。コスチューク、そして宍戸によれば、このような「内的矛盾」こそが子どもの「質的な発達」を促す「原動力」である。それゆえ、教育は、子どもに「内的矛盾」を起こさせ、それを「方向づけ発展させる仕事」を負わなければならないのである（宍戸 1970：59）。

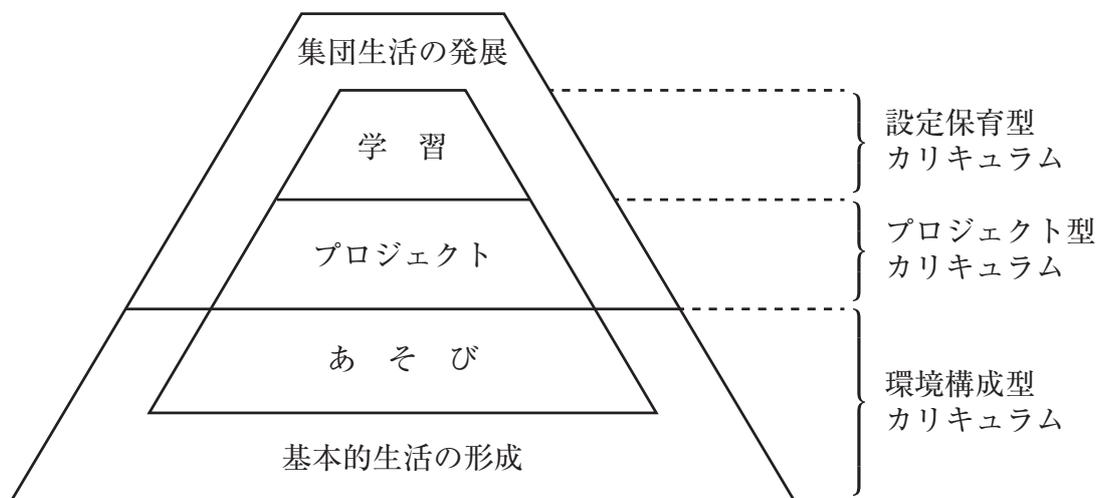
「内的矛盾」を生起させるための媒体として重要視されるのは「集団」であり、集団が、自らの知識を「実践的活動に応用」することによって、「内的矛盾」は引き起こされ、子どもの知的、のみならず身体的能力の「全面的な発達」を促進するという（宍戸 1970：60）。宍戸は、「内的矛盾」は、まず「集団内の矛盾」として表れるとする。そして、その「内的矛盾」が、個々の子どもの思考過程、思考方法として内面化され獲得されると考える。このような、発達の過程を、宍戸はヴィゴツキーのテーゼ、すなわち「高次の精神機能は、最初は集団的・社会的活動、精神間的機能として、次に、個人的活動、子どもの思考の内部的方法として、精神内的機能として現れる」（ヴィゴツキー 2001：383）に示唆を受けて描き出している（宍戸 1970：60）。

一方で、教育において集団がもつ意義については、1960年代から宍戸はマカレンコの影響を受けている。集団の形成とその深化が教育的効果を発揮するのは、教育における「見通し」、つまり教師と子どもが抱く教育の計画への予期を通してであるという。例えば、宍戸は、教育における「見通し」について述べた、マカレンコの次のような言葉を引用している。「人間を教育すること——それはかれ（子ども）のなかに見通し路線を育てることを意味している」。見通しには、「近い見通し」「中間の見通し」「遠い見通し」の三つがあ

る。「近い見通し」とは「時間的にはすぐにでも実現可能」な計画、「中間の見通し」は「時間的にいくらかはなれている集団的できごとの計画」、「遠い見通し」とは、「施設の将来、そのいっそう豊かな、いっそう文化的な生活」の実現を意味するという（宍戸 1969：73）。マカレンコによれば、個々人の「愉快」という原則から「近い見通し」をたてると、子どもを「享楽主義者」にしてしまう。それに対して「集団的な観点」にたつと、「子どもたちは大部分が、積極性、かなり顕著な自尊心、群衆からぬきんでたいという意欲、幅をきかせたいという意欲をもっている」ため、そのような意欲を「動的側面」として捉え、それを生活の向上へと結びつけることを試みる必要があるという（宍戸 1969：74）。

5. 2000年代以降における保育構造論の更新：「プロジェクト活動」の導入

宍戸は、自らの保育構造論を、2009年にいたって更新している（宍戸 2009）。



図表5 台形モデル

その形状が台形をなしており、それを宍戸自身が特徴の一つとして挙げていることから、これを「台形モデル」と呼んでおこう。台形モデルにおいては、基本的生活の形成を基礎として、集団生活の発展が実現していく過程を保育構造の外壁と見なし、その内部にあそび、プロジェクト、学習という三つの活動が骨格として位置づけられている。1982年の図式との相違は、仕事（労働）と位置づけられていたクラス運営活動が、「プロジェクト」という新しい概念によって捉え直されていることである。

台形モデルでは、一番の基礎をなす活動を基本的生活の形成に支えられたあそびとし、この最下層を「環境構成型カリキュラム」によって実現するものとしている。それに上構するものとして、集団生活の発展の中で展開されるプロジェクト型カリキュラム、同じく集団生活の発展と並行して展開される学習を設定保育型カリキュラムとして位置付け、これら三種のカリキュラム形式が、台形モデルにおいて共存し、相互作用し合う一体化したものとして捉えられている。

上掲の保育構造論と相違する点としては、以前においてはヨコに並列されていた3つの活動が、台形モデルにおいては重畳するものとして位置づけられている点である。さらに、最上層に学習、すなわち課業が位置づけられている点も目を引く。この重畳構造は、子どもの「年齢発達」を考慮に入れて形成されたものと考えられる（宍戸 2009：59）。宍戸は、前述の3つのカリキュラム類型のうち、最も基層をなす環境構成型カリキュラムを「低年齢児の保育活動を意味」するものとし、最上層をなす学習（課業）を中心とした設定保育型カリ

キュラムを「年長児の活動」として位置づけている。ただし、あそび・プロジェクト・学習の三層構造が、この順に小さく描かれていること、すなわち構造全体に占める学習（課業）のウエイトが必ずしも大きくはないということを宍戸はあわせて強調していることには注意しておきたい（宍戸 2009：58）。

活動の三つの軸が、横並びに並列されていた82年構造図では、三つの軸の相互関係、特に発達との関連が明らかではなかった。82年構造図の基礎となった名倉の生活時間の構造図が、そもそも5歳以上の子どもの生活時間を念頭に置いたものであったことの影響からか、82年構造図は、4～5歳の高年齢児のみを射程に入れた、いわば年齢限定的なものとなってしまうていた。そのことは、乳児期からの発達のプロセスを十分に組み込めていないことを意味していたともいえよう。この弱点を克服すべく、宍戸が施した修正が、横並びの並列から、縦向きの重層構造、重畳構造への転換であった。重畳構造化された台形モデルにおいては、より下層の活動が、発達段階のより初期を示し、その初期における活動を基礎として、発達段階の上昇と共に、活動が重畳化し、多層化し、複雑な構造を成していく様を表現しようとしているといえるだろう。

台形モデルのもう一つの新規な特徴は、「主題」を中心とする活動を組み込んだことである。「主題」（課題）を中心とする保育過程は、宍戸によれば、以下の4つの段階からなる（宍戸 2017：279）。①共通の主題（課題）の発見。子どもたちの具体的な生活の中から、子どもたちが興味・関心を抱くテーマについて話しあい、クラス全体で意欲的に取り組める共通の主題（課題）を見出す。②協働的な探究活動の展開。課題の解決へ向けたプランを話しあい、それを共同して実践する。③まとまった成果の発表。④次の活動へ向けて、課題に取り組んだ成果があったことを喜び合う。

宍戸は、保育構造論が形式的に導入された場合、創造的実践が妨害されてしまう危険が伏在することを認識しながらも、保育活動を総体的にわかりやすく「把握」するためには、このような「図」が必要であるという認識上のメリットを強調している（宍戸 2000：105）。

上記以外にも、保育者がそれまで行ってきたクラスの管理運営上の仕事を子どもたちが担う「クラスの自主的な運営活動」が特記されることもある（宍戸 1982：45）。初めに子どもが仕事をこなす形態は、保育者の「お手伝い」であるが、やがて「当番」として、「順番に、交替で、日常生活上で、くりかえされる簡単な仕事」をこなすことができるようになる（宍戸 1982：57）。当番活動を通して、子どもたちはグループ意識を育てていく。「クラス集団を支えている力、つまり主導権が、保育者から子どもたちの手に移っていく」という（宍戸 1982：70）。保育者から子どもへの「主導権」の移行は、子ども集団の組織化・自律化によって可能になるのであり、それこそが宍戸の保育構造論の目標でもある。子ども集団の組織化・自律化は、子どもの園生活に根ざした集団的活動を通して実現するのであり、宍戸にとっての子ども集団とは、保育方法であると同時に保育形態であり、保育目標でもある複合的な概念なのである。

附記

本稿は、科研費若手研究Bの研究助成（題目「「伝えあい保育」の理論と実践における人間観・社会観の関連に関する思想史的研究」）による成果の一部である。なお、本稿の一部は、日本教育学会第79回大会（2020年8月、神戸大学）において「宍戸健夫による保育構造論の構築に対する教育学の影響」と題して発表されている（当該大会はオンライン開催）。なお、本稿執筆時に参照した書籍のいくつかは、宍戸健夫氏本人から筆者への恵贈によるものである。ここに記して、宍戸氏に謝意を表したい。

参考文献

- 安部富士男『遊びと労働を生かす保育』国土社、1983年。
- 安部富士男『幼児に土と太陽を：畑づくりから造形活動へ』（新装版）、新読書社、2002年。
- ヴィゴツキー『思考と言語』（新訳版）、柴田義松訳、新読書社、2001年。
- 加藤繁美『子どもの自分づくりと保育の構造：続・保育実践の教育学』ひとなる書房、1997年。
- 加藤繁美『対話的保育カリキュラム下：実践の展開』ひとなる書房、2008年。
- 木下龍太郎・宍戸健夫「幼年教育」川合章編『学校教育』（講座現代民主主義教育第4巻）、青木書店、1969年。
- 久保田浩「単元構成と保育計画」梅根悟編『保育原理』（新・教職教養シリーズ）、誠文堂新光社、1968年。
- 久保田浩『幼児教育の計画：構造とその展開』（第3版）、誠文堂新光社、1975年。
- コスチューク「子どもの発達と教育との相互関係について」『発達と教育』村山士郎・鈴木佐喜子・藤本卓訳、明治図書出版、1982年。
- 小山優子「幼児教育カリキュラムの史的展開：戦後わが国の「保育構造」論を中心にして」『鳥根女子短期大学紀要』40巻、2002年。
- 宍戸健夫『日本の集団保育』文化書房博文社、1966年。
- 宍戸健夫「保育の歴史」横山明・田代高英・丸尾ふさ・宍戸健夫・土方康夫『現代保育入門』風媒社、1967年。
- 宍戸健夫「遊びの発展」宍戸健夫・田代高英編『幼児の遊びと集団づくり』明治図書出版、1969年。
- 宍戸健夫『集団保育：その実践と課題』風媒社、1970年。
- 宍戸健夫『幼児の集団と教育』さ・さ・ら書房、1975年。
- 宍戸健夫「私たちの研究を科学的なものに：城丸論文から学ぶもの」『季刊保育問題研究』（61）、1977年。
- 宍戸健夫「保育計画とは何か」宍戸健夫・村山祐一編著『保育計画の考え方・作り方：幼児の保育計画と実践』あゆみ出版、1982年。
- 宍戸健夫『土筆の記：私の履歴書』一誠社、1996年。
- 宍戸健夫『保育実践をひらいた50年』草土文化、2000年。
- 宍戸健夫「展望：保育学の過去・現在・未来：保育カリキュラムを中心に」『保育学研究』39、（1）、2001年。
- 宍戸健夫『実践の質を高める保育計画：保育カリキュラムの考え方』かもがわ出版、2003年。
- 宍戸健夫『実践の目で読み解く新保育所保育指針：保育の計画・カリキュラムと評価を中心に』かもがわ出版、2009年。
- 宍戸健夫「保育構造論から見る保育計画：プロジェクト活動を考える」『季刊保育問題研究』（277）、2016年。
- 宍戸健夫『日本における保育カリキュラム：歴史と課題』新読書社、2017年。
- 宍戸健夫・大場牧夫「保育集団をめぐる」大場牧夫『大場牧夫保育対談：幼児教育の本質を求めて』フレーベル館、1981年。
- 宍戸健夫・勅使千鶴・石川正和「幼児教育の方法と内容」矢川徳光・城丸章夫編『幼児教育』（講座日本の教育11）、新日本出版社、1976年。
- 宍戸健夫・田代高英編『保育入門』有斐閣、1979年。
- 宍戸健夫・勅使千鶴・木下龍太郎編著『幼児保育学の初歩』青木書店、1992年。
- 宍戸健夫・土方弘子編著『乳児の発達と保育計画』（乳児の保育計画と実践①）、あゆみ出版、1986年。
- 宍戸健夫・土方弘子編著『乳児の保育内容を豊かに』（乳児の保育計画と実践②）、あゆみ出版、1987年。
- 宍戸健夫・渡邊保博・木村和子・西川由紀子・上月智晴編『保育実践のまなざし：戦後保育実践記録の60年』かもがわ出版、2010年。

- 城丸章夫「子どもの発達と集団づくり」『季刊保育問題研究』（61）、1977年。
- 城丸章夫「「指導」こそが民主的学級経営の原点」大畑佳司・豊丹生信昭編『学級経営の計画と実践：1・2年』あゆみ出版、1981年a。
- 城丸章夫『幼児のあそびと仕事』草土文化、1981年b。
- 玉置哲淳『人権保育のカリキュラム研究』明治図書出版、1998年。
- 東京保育問題研究会編『保育問題の20年1：会報巻頭論文集』博文社、1972年。
- 東京保育問題研究会編『伝えあい保育の25年：東京保育問題研究会のあゆみ』文化書房博文社、1983年。
- 豊田和子編『実践を創造する幼児教育の方法』みらい、2013年。
- 名倉啓太郎「遊びと仕事」『幼年期・発達段階と教育1』（岩波講座子どもの発達と教育4）、岩波書店、1979年。
- 土方康夫『保育とはなにか』青木書店、1980年。
- マカレンコ『集団主義と教育学』矢川徳光訳、明治図書出版、1960年。
- 宮坂哲文「生活指導の本質」宮坂哲文編者代表『生活指導』（明治図書講座・学校教育第11巻）、明治図書出版、1956年。
- 宮坂哲文『生活指導の基礎理論』誠信書房、1962年。
- 師岡章『保育カリキュラム総論：実践に連動した計画・評価のあり方、進め方』同文書院、2015年。

Characteristics of curriculum plan in nursery schools constructed by Takeo Shishido

Naoya Yoshida

Osaka Prefecture University

Abstract

This paper focuses on characteristics of curriculum plan in nursery schools suggested by Takeo Shishido. Shishido's curriculum plan was constructed through impacts from results of the postwar study of education. His study on curriculum plan has been his lifework, inspired by the curriculum plan presented by Yasumasa Miki, Hiroshi Kubota and Fujio Abe, the theory on class management by Fumio Shiromaru, the developmental theory of Keitaro Nakura. Although his scheme was constructed and published for the first time in 1980's, it has been under reformation after 2000.

Key Words: collectivist theory of early childhood education, class management, project activities